

---

書 評

---

Tom F. Driver: *The Sense of History in  
Greek and Shakesperean Drama*  
(N. Y.: Columbia University Press, 1960)

木 村 俊 夫

演劇はとりわけ歴史と緊密な関係を持っている。演劇には当然その背後にある歴史意識、時間意識が反映せざるを得ない。この観点から、ギリシャ劇及び Shakespeare 劇の異った構造を、それぞれの時代の時間、歴史観と関連させて解明しようとしたのが本書の内容である。

全体は3部に分れている。

第1部第1章において、演劇と歴史の相関関係が考察され、第2章ではギリシャの歴史意識の特徴が論じられる。それは本質的にはむしろ非歴史的なものである、と規定される。自然の均衡(第1章の表題)の中に実在を求めたギリシャの歴史意識においては、時は目的を持たず、持続する歴史を欠いている。又循環的な時間という考え方からは新しきもの、創造の可能性への信念は生れて来ない。ギリシャ人は時を空間に従属させ、又これを本質的には過去として理解した。又実在の持つ永遠の構造により関心を示した。

第3章ではユダヤーキリスト教的歴史意識の特質が論じられる。ヘブライ的思考はギリシャ的なものとは反対にきわめて歴史的である。著者は此所で、契約、イスラエルの使命(第3章の表題)、神の目的、予言者、季節の祭りから歴史事件を記念する祭りへの推移、Homer と Issac の犠牲の物語りの比較等を通して、ヘブライの歴史意識における記憶の重要性、宗教一国民史がたえず書き替えられた事実、旧約に充満する時間的ものの方の見方、新しきものの可能であるとの考え、つまり時はギリシャにおけるようには閉ざされていず開かれている事、を強調する。ヘブライの時間意識は単に線的なもの「上昇傾斜線」的なものではない。そこには二つの原理が支配している。歴史的な時が明らかに認められると共に、時の同時性、循環の意識もたしかにあった。著者はこの事を自然的、反復的なものを司る祭司と、歴史的予言者の対立として興味ある説明を行う。結局ギリシャには「永遠の現在」があったのに対して、イスラエル

には「歴史的現在」があった。イスラエルの神学は歴史の神を啓示するのである。

キリスト教においては歴史と永遠の関係は更に複雑となる。キリストの化肉は歴史的事件であると共に、歴史の完成である。事件の歴史の独自性とその超越的解釈の間に緊張関係がある。化肉という事のためにキリスト教においては、一切の歴史を形式としてみる（それはヘブライ思想には欠けていた）事ができ、その意味である程度はギリシヤ的な考え方を含む事になる。著者は Shakespeare の作品の中に右の考え方の反映を見出す。エリザベス朝は現代におけるような進歩の観念を未だ持たず、ある程度での懐疑思想はあったにしても、根本的には右のような歴史——時間意識に貫かれていたからである。

上記 2・3 章の議論は Collingwood, Tillich, Boman, Auerbach, Wright, Cullman, Niebuhr 等の広般な研究思索の援用によってなされたもので、著者も随所にこれに言及し、これ等から引用しているが、ギリシヤ——ヘブライの伝統を歴史——時間意識の観点から見事に要約している。この第 1 部が全体の 3 分の 1 の頁を占めているが、この事はこの演劇の研究書がくわしいギリシヤ・ヘブライの歴史観の比較考察を逕てはじめて成立し得るものである事をよく示している。

著者はついで劇という形式の持つ原理的諸問題にふれ、時の要素が劇の行為と構成の分析にとって至極重大である事を強調した（第 2 部）後、漸く第 3 部において具体的に作品の比較に入る。

第 3 部にはギリシヤ劇、Shakespeare 劇それぞれ 4 つが比較される。

第 1 の比較は歴史劇である。此所に *The Persians* (Aeschylus) と *Richard III* がとりあげられる。次いで共に父の仇討を扱う *Oresteia* (Aeschylus) と *Hamlet* が比べられる。この 2 つは共に非常に長いという点でも共通しているのであるが、逆に非常に短いという点で共通する *Oedipus Tyrannus* (Sophocles) と *Macbeth* が第 3 の比較の対象となる。この 2 つは共にその見事な形式の中に劇的時間の問題を鋭く示しているのである。第 4 のそして最後の比較は、共に *tragi-comedy* であり、相似た夫婦関係を扱う *Alcestis* (Euripides) と *The Winter's Tale* に向けられる。これ等いずれの比較においても第 1 部に要約された 2 つの時代の歴史観、時間の観念の反映が、作品自体の緻密な分析に裏付けされて、たくみに捉えられ詳論される。

時との関連で演劇を論ずるにしても、所謂時の一致の原則を機械的にあてはめてみた時代は遠くにすぎている。併し時の問題への関心自体が消えてしまったわけではない。この観点から行われた業績の内、まとまったものとして 1879 年の P. A. Daniel

のもの (“Time Analysis of the Plays of Shakespeare,” *New Shakspeare Society*, Series 1, Part ii) があるが、それは物語りの duration をテキストから「実証的」に測定しようとしたものであった。併し、その結果、時計の時を基準にしたこうした測定では Shakespeare 劇に流れる時は充分にはつかめない事を示している。併しもうこれと同じ頃にこうした機械的考え方を脱して、演劇のダイナミックな時間処理への認識は所謂 ‘double time’ の説を生んだが、この方面の一応の集約が 1912 年に Mable Buland によって行われた (*The Presentation of Time in the Elizabethan Drama*, Henry Holt & Co.) 以後においても哲学的、心理的、演劇美学的等の見地から演劇の持つ時間の解明はいくつかのすぐれた業績を生んだ。Buland 以後のこうした方向での研究の内、Driver のこの著は最近のすぐれた収穫であり、演劇一般と、ギリシヤ劇と、そして又 Shakespeare の作品と、歴史、時間とのかかわりの問題に貴重な手がかりをあたえてくれるものであり、同時にそれはヨーロッパの文化伝統の興味ある研究書となり得ている。

Paul A. Jorgensen: *Redeeming Shakespeare's Words*  
(Berkeley and Los Angeles: University of  
California Press, 1962)

上 田 依 子

Spurgeon, Clemen, W. G. Knight 等の imagery 研究を契機として、imagery を考慮せずして Shakespeare's plays を論ずることができないと言える程に、Shakespeare's plays に対する imagery を中心とした approach が盛んである。同時に、作品をその生れた時代から切り離して現代の時点において解釈する[丈では、Shakespeare の作品を十分に理解することは出来ないとの観点から Elizabethan background に関する研究も進んでいる。更に最近では、E. M. W. Tillyard, T. Spencer, H. Craig などの優れた研究の成果を利用して、いわば Shakespeare の作品をエリザベス朝に還元して批評家の触媒を通した解釈へと移りつつある。ここに取上げた P. A. Jorgensen の研究も、こうした imagery を中心とした aesthetic approach とエリザベス朝における政治的、社会的、宗教的、思想的背景を重視する最近の Shakespeare

研究の潮流から生まれたものである。

彼は従来の imagery 一辺倒の approach に対して、Shakespeare's plays における word の重要性及びテーマを表わす key word の存在を主張する。本書はこの key word 及び key word とはいえないが重要な意義をもつ語七つについて、その Renaissance connotation ならびに “how this connotation was utilized by Shakespeare in his dramatic message.” (Preface, p. vii) をのべたものである。即ち著者は、Shakespeare の作品中に頻出する語がエリザベス朝の観衆にはどのような意味をもっていたかを文学作品は言うに及ばず当時の宗教、政治、社会に関するあらゆる文献、時としては military text books をも漁獵して調べ上げたのである。

第一章 “Honesty in Othello” は、彼が Preface で

because it best illustrates the importance of finding the exact meaning of a crucial word and also because it most fully displays the type of research that is necessary if one would place a pivotal Shakespearian word in its rightful content. (pp. vii-viii)

と述べている如く、著者の研究法がよく分る、説得力にみち文学の科学的研究の好例ともいうべき優れた論文である。honest の頻発がこの drama の美を損っているとの従来の評価に対し、著者は honestこそ key word であり、Iago は “knave-hunting abilities” を具え moralities の Honesty という複雑な役割を演じていることを実証し honest man のポーズをした Vice という従来の Iago 観を覆えしている。エリザベス朝において問題となった “How may one know the honest man from the knave?” に着目した著者は、この問題を扱った当時の drama を探って、semi-morality comedy の *A Knack to Know a Knave* (1594) において honest という epithet が単に conventional disguise の手段となっていることを発見した。当時の観衆にとって、*Othello* は knavery に対して最も油断なく目を配るべき主人公が、Honest に変装した knave を識別すべき務めを放棄するといった奇妙な転倒が行われている drama だったのである。

第二章 “Much Ado About *Nothing*” では nothing の positive meaning と negative meaning を中心にして、エリザベス朝における nothing の多義性及び Shakespeare の作品に現われる nothing の意味が論じられている。神学論において、創造の始めに存在した無、或は又現世の全事物の本質的な消滅をあらわす意味に用いられたため、この語は word game の好個の材料となっていた。更に Shakespeare の

作品においては、obscenity や、創造力の意味にも用いられていたこと及び nothing と noting の混同を指摘して、著者は *Much Ado About Nothing* における nothing がこれら全ての意味を包含するとの結論を出している。

第三章“Hotspur's bright Honour”では、military honour が当時もてはやされた話題であったこと、*Henry IV* の先駆をなす rashness と honour の関係を取扱った作品の存在したこと、及び、真の honour には virtue や obedience to God が必要と考えられていたことが明らかにされている。まとまってはいるが、*I Henry IV* における unifying theme は military honour であり、Hotspur はその具体的表現であるとのこの章の冒頭の言葉が、具体的に作品に密着して論じられていれば、一層読み応えのある論文となったであろう。

“to redeem time”が“to take full advantage of the time that man is given here on earth for salvation.”(p. 59)

を意味することを実証した第四章は、Othello 論と共に Jorgensen の研究法なくしてはなされえなかった、Shakespeare の作品の解釈に多大の貢献をなす特筆すべき研究である。Time の観念は *Richard II* 以後の Shakespeare の drama において次第に重要な意味をもってくるのであるが、本書においては、*Henry IV* に限定して redemption of time の問題が論じられている。“redeeming time”は Ephesians と関係を有し、*The Redemption of Time* という説教があった程、Time に関する問題は当時の宗教関係の論文によく取上げられていた。著者はこの句の誤った解釈によって作品自体の解釈も誤っていること、“idleness”も今日とは違った“the greatest signe of a lost man”という宗教的な意味をもっていたこと、従って Prince Hal は彼一流のやり方で redemption of time を行っていたと考えられること、*Henry IV* は当時の観衆には非常に宗教的な教訓にみちていたこと、を実証している。*Henry IV* からの引用のみならず、当時の文献からの引用箇所、順序も適切で、現代批評家の説も織りまぜられたこの章は、本書中最もみもり多き、秀逸した章である。

第五章“My name is Pistol call'd”では当時の最新式武器であった Pistol の inaccuracy や misfiring がこの話の comic connotation となっていたことが述べられている。Pistol という名前と彼の性格の comic element の関係が、他の characters の comic element との対比において論じられていたら、更に面白いものになっていたであろう。

著者が最もスペースをさいている第六章も、honest 論、time 論に劣らぬ著者の精魂傾けた研究である。前二者に比してやや論述がもたついている感はあるが、“too

noble for the world” という Coriolanus の tragic flaw 説を肯定し，“true nobility の Elizabethan connotations を調べて，“too noble”は“imperfect use of reason”に帰結されることを立証した労作である。この芝居は、当時花を咲かせた“What is true nobility?”の問題に対する解答というべきものであった。又、死によって罪が贖なわれるとの noble death の解釈は Shakespeare の characters の死の意味、作品の意味と人物の死を考察する上に大いに参考となるであろう。

最後に第七章では“Hamlet’s World of Words”が論じられている。この論文は、“most frequently used word”を key word とする著者の方法論が、必ずしも全ての作品に適用されえないことを示している。主に Text の熟読と Shakespeare の他の作品との比較によってなされたというこの論文は、著者の研究法が歴史的事実を離れてはその真価を発揮出来ず、著者が又作品の審美批評よりも historical approach において優れていることを明らかにしている。Hamlet の愛読者、研究者ならば、この章を読んで著者の読みの浅さというか、粗雑ともいえる解釈にかなりの抵抗を感じるであろう。

まず第一に根本的な問題は、“Hamlet’s main linguistic contribution to his corrupt society” (p. 108) とか、“the verbal haze (p. 109) (イタリックス筆者) などにも窺える著者の考え方である。著者は、先王毒殺をめぐる Claudius と Hamlet の態度を“a life of ‘painted word’”と“a life of silence”の対照において捉え、Claudius の“painted words”を始めとする色々の登場人物の言葉が Denmark の corruption を隠蔽し、Hamlet はその言葉で飾られた社会の表皮をはいて内部の腐敗を“words like daggers”で露き出すのだと述べている(傍点。イタリックス筆者)。著者によれば、この劇は言葉と誓いの過剰に次第に不信の念を抱き始めた時代に、同じく言葉の空しさを感じ言葉に倦怠の念を催した Shakespeare の“feeling of depression”の最も完全なる dramatization なのである。しかし、drama において登場人物の口を通して言葉で表現しなければ、どうしてある事実なり感情なりを表現することができようか? Jorgensen は drama における dialogue, words の function をどの様に考えているのであろうか?

第二に著者は、“suit the action to the word”の行動規準と行為の背反が Hamlet や Claudius を悩ましたと解釈する際、word の対置概念を action, deed としている。が、ここで word と action の対比において捉えられているものには、T. Spencer の Appearance and reality の解釈に包含されるべきものもある。

Prayer-scene における Claudius の

There is no shuffling, there the action lies

In its true nature. (III, iii, 61)

を “In brief, the word must be suited to the action” (p. 112) と片付け、

My words fly up, my thoughts remain below.

Words without thoughts never to heaven go. (III, ii, 97)

を “futility of words unaccompanied by deeds” (p. 112) の例として引用しているが、著者の thoughts と deeds の観念に疑問をもたずにはいられないのである。人間のうわべの行為とその行為をする時の人間の心理とは常に一で結ばれてはいないことなどあらためて断るまでもないであろう。同じく Nunnery-scene における Ophelia に対する Hamlet の激昂の原因を女性の affectation に求めている点は J. F. Danby の解釈に遙かに及ばないし、Ophelia の部屋での Hamlet の沈黙を “The very use of speech, ... seems distasteful to him” としているのも、Hamlet の心中の複雑な葛藤とその深さに対する理解に多少欠けているのではなからうか？ 従来あまり関心を払われていなかった、死を前にした Hamlet の ambiguous な “The rest is silence” に注目し、これを Hamlet の spiritual pilgrimage という process において捉えたのは適切であるが、その “the happiest end for himself seems to be silence” との解釈には首肯しえないのである。Text を熟読すれば、Hamlet が死の沈黙の世界を happiest end とみていたかどうかは断定しえないのではなからうか？

以上の概評からも明らかな如く、著者が

the hopeful doggedness that must be used by future investigators who will undoubtedly succeed in bringing out the full connotation of other important words” (Preface, p. ix)

との確信を抱いている本書は、Hamlet 論は別として、その Title “Redeeming Shakespeare’s Words” に背かぬ内容を持ち、今後の Shakespeare 研究における歴史的 approach の必要性、重要性、可能性、方法論をさし示しているのである。やがて T. Spencer, E. M. W. Tillyard などの歴史的研究書と並んで、Spurgeon, Clemen, Knight 等の imagery 研究にも劣らぬ位置を Shakespeare 研究書の中で占めることになるであろう。諸論文に先立っておかれた “A Plodding Student” という詩に再び目を通す時、最初の印象とは違って自己の研究及び研究法に対する著者の揺がぬ自信を強く感じずにはいられない。

Hugh Hunt: *Old Vic Prefaces*  
 (London: Routledge & Kegan Paul, 1954)

石 田 章

著者の Hugh Hunt は、1949年から1953年にかけて、Old Vic のために六つの Shakespeare 劇を演出している。 *Love's Labour's Lost*, *Hamlet*, *Twelfth Night*, *The Merry Wives of Windsor*, *Romeo and Juliet*, *The Merchant of Venice*, *Julius Caesar* である。本書はその舞台稽古に際して著者が俳優達に与えた助言を基にして書かれたものである。

いま、この本を読み、そしてそれを評価するにあたって、われわれは著者の Hunt が演出家であるということ、そして、これは実際の舞台創造者である演出家が書いた Shakespeare 論だということを何よりも先づ心に留めておかねばならない。この本の中に academic な研究や、学問的事実に裏付けられた critical study が見られないからといってそれを欠点としてあげつらうとしたら、それはとんでもない見当違いというものである。著者自身その点については、はっきり序文の中で断っている。

“If these prefaces have any interest to others, it is an example of a producer's approach to an acted play, as distinct from a scholar's approach to a printed play.” 更にまた言葉を継いでこう語っている。“His (*i. e.*, producer's) approach is an imaginative approach, his interpretation is hedged by circumstances. However much he may and should use the scholarship of the literary critic to provide him with background and knowledge, it is his imagination and his judgement that will finally affect his interpretation. For the producer has to take into account a primary factor of the stage which is unnecessary and unbecoming to the scholar—the live performance of the play to a contemporary audience.”

Hunt の念頭にある Shakespeare は、大学の text になったり学術論文の対象になったりする Shakespeare ではない。舞台の上で生き生きと息吹き躍動する Shakespeare である。そして、演出家の仕事は、実際の舞台に Shakespeare を生かすことなのである。

Shakespeare 劇の staging について書かれた書物は今までにも決して少なくはない。例えば、Ronald Watkins の *On Producing Shakespeare*, C. B. Purdom の

*Producing Shakespeare*, G. Wilson Knight の *Principles of Shakespearian Production* など好著と目されるものでもすぐに幾つかは思い浮べることが出来る。しかし、演出家の書いた Shakespeare の作品論となると、私の知る限りでは極めて少ない。その数少ない中で、今更言うまでもないが、Harley Granville-Barker の *Prefaces to Shakespeare* は、この種の書物の最高のものであろう。後にも先にも、これに比肩するだけのものはまだ出ていない。しかし、Barker は、厳密に言えば、演出家であるが同時に、或はそれ以上に、学者でもあった。彼の *Prefaces* はその様な彼の演出家としての才能と学者としての学識とが渾然と融合して他の追従を許さぬ領域を展開する。実際者としての演出家の感覚と学者としての学識がこの様な形で作品評価に表わされた例はそう多くはないし、また今後ともそう簡単に出て来るとは思われない。

最初に書いた様に、Hugh Hunt は実際の演出家である。そして、將にそれ以外の何ものでもない。この本がわれわれの興味を引くとすれば、そして、何らかのユニークな存在理由を主張しようとするならば、それはまさしく、演出家以外の何ものでもない人によって書かれた、というこの一事に帰するだろう。

Hunt という人は、演出家であることを、そして演出家の限界というものを知り尽くしてこれを書いたように私には思える。最初に引いた彼の序文の言葉はそれを端的に示している。演出家の限界とは何か？ それは、演劇とは所詮、俳優、舞台、道具、光といった様な、有形の具体的媒体を通じてのみ表現可能な芸術であり、演出家とは、作品をも含めてその様な形而下の要素を通じてのみ自己を語るしかない存在だ、ということである。演出家が作品を前にして、どの様に精緻にして深遠な構想をこらしていたとしても、それらの構想の背後には厳然たる具象の制約がひかえていて、ひとたび演出家はその活動を始めるとそれらの制約が途端に大きく姿を乗り出して来るのである。

Hunt はこの様な演出家の限界或は制約を充分に知り尽くして、決してその枠外に足を踏み出すことはしないのである。Hunt の Shakespeare 論が、同じ演出家であっても、Granville-Barker のそれとも、或はまた、Gordon Graig のそれとも異っているのはこの点に於てである。

一例を挙げると、*Merchant of Venice* の中で、その人物構成を説いて、Hunt は当時の Venice に於ける二つの階級 (gentleman と merchant) 及び二つの races (Asian と European) という grouping を試みている。がしかし、この場合、それ

は当時の歴史的事実を傍証し学問的に裏付けられてのものではない。たとえ Hunt のこの試みの背景に、彼自身の scholarship がひかえているにしても、彼はそれを表面に出すことは決してしないのである。あくまでも、演出家としての直感として表わされ、実際の上演のためのよりよき方法として処理されるのである。だから、この様な grouping への試みと共に、その二つの groups の distinction of cultures を表出するための具体的手段として、夫々の race 或は階級の衣裳の工夫というような具体的配慮に言及することを彼は決して忘れないのである。

又、同じ *Merchant of Venice* で、Shylock の考察に際し、Hunt はこの劇を story writer としての Shakespeare の才能が見事に花を開いた fairy tale として捕える。しかし、一方で、playwright としての Shakespeare の眼と腕が、本来単なる villain 役である筈の Shylock に、無意識の内に只の villain 役の枠を越えた real な人間の姿を描き込んでしまったのだと説明する。興味ある考察だが、しかし Hunt の論述はそれ以上には出ない。何故なら、Hunt の目的は Shakespeare の characterization の技巧や意味そのものを追求することではないからである。各登場人物の中での Shylock の役柄を、演出者として、俳優達により適確に理解させ表現させることが目的なのである。だから、いたづらに Shylock の分析にのみ筆を延ばすことは意識的に避ける。物足りないと言えば甚だしく物足りないだろう。がしかし、そこには、何度も繰り返すが、現実の舞台に足を着けた実際家としての演出者の意識が深く根をおろしているのである。

この様な限界を念頭に置いた上でこの本を読んでみると、随分示唆に豊んだ見解に出喰わすだろう。*Romeo and Juliet* の本質に言及して、その lyrical effect を挙げ、それを現代の観客の中にとどう生かし伝えるかを論じたり、Romeo の人物分析に際し、劇の進行につれて、この hero が、boyhood から manhood へと成長してゆく過程を論じたくだりとか、*Hamlet* に於て、Hamlet を witty で行動的な性格としてとらえ、彼の人気の所在をその normality に求めようとする見解、或はまた、*Twelfth Night* で、その fantasy の世界を表わすに際し、setting の問題にふれ、現代の観客、特にその imagination に対する考察、等々、興味ある示唆的な論考が随所に見られる。

各作品を論ずるにあたって、先ず作品解釈、setting、costume への示唆、最後に各登場人物論という論述構成をとっている。Barker の Preface に似ている。又、各作品の最後に、Postscript と題する短文が付せられている。これは実際の上演を経た後で、その上演を通じて感得した問題点を各作品について挙げていっているのである。さりげ

なく書かれているが、これが実は大変面白い。

われわれの周囲には、学者の書いた Shakespeare の学問的研究書は殆んど一生かかっても読み切れない位ある。そのうちで Shakespeare を研究するものが必ず読まねばならぬものだけでも数え切れない位あるだろう。Hunt のこの著書が、沙翁研究者にとって必読の書だなどとは私はお世辞にも言はない。しかし、Shakespeare は、本来、研究されるためにあるのではない。舞台上で演ぜられ、観客がそれを楽しむためにあるのだ。これは何と云っても本当である。そして、Shakespeare をその様に直接民衆に結び付けるのは俳優であり、そして演出家である。彼らを通じて Shakespeare は本当に生きるのである。だとすれば、Hunt のこの著書も、やはり独自の存在理由を主張しようと言えるのではなからうか。

Hugh Hunt は1911年生れ、Everest 初登頂で有名な Sir John Hunt の実弟である。Oxford に学び、1933—4年にかけて Oxford University Dramatic Society の President をつとめた。1934年 Crydon Repertory Theatre での *King Lear* の演出で本格的な演出家として debut。以後、Dublin の Abbey Theatre, Bristol Old Vic Company, London の Old Vic Company 等の演出家として活躍。最近では Australia の Elizabethan Theatre Trust の演出を担当している。

Charles T. Prouty (ed.): *Studies in the Elizabethan Theatre*  
(Conn.: The Shoe String Press, 1961)

尾 崎 寔

Shakespeare の劇場、上演と云った具体的な事実に対する関心は、最近の Shakespeare 研究の重要な部分を占めている。Yale の Professor of English である Charles T. Prouty の手で編まれたこの書も、そう云った関心にもとづいて書かれた三つの論文を収めたものである。序文の中で彼は次のように述べている。

学者はエリザベス朝時代演劇の上演条件について一応の知識をもっているのだが、それらの知識が学校、大学、そして学問的でない世界にはなおさら、行きわたることはまれである。これは Shakespeare の現代演出や、時たま行われる他のエリザ

ベス朝劇作家たちの作品の復活上演の際にも見られることである。張り出し舞台が、カーテンなしに用いられているかと思えば、ひっきりなしに「暗転」が行われて、伝統的な劇場における閉幕に代り、その結果劇の流れを妨げている。このようなやり方についてオリジナルテキストからは、何のうらづけも得ることはできない…

この書が意図しているのは、それぞれの問題に関する突っ込んだ専門的な研究と云うよりは、Shakespeare や同時代の劇作家たちの作品の理解を助けるべく ‘a brief synthesis of three aspects of Elizabethan Theatre’ を提供することにある。その意味では、劇場関係の専門家だけでなく、エリザベス朝劇を主としてテキストを通じて親しみ、環境、背景をもつ活きたドラマとして感ずることの少かった人達にとっても同様に、rewarding な書と云えよう。なおこの書に収められた三つの論文については最後にその Contents を記すことにするが、私はその中で特に James Stinson の “Reconstructions of Elizabethan Public Playhouses” について、Shakespeare のオリジナル舞台に関心をもつものとして得るところが多かったので、ここで紹介してみたいと思う。

Stinson の目指すところは、一口に云って、現在までになされてきたエリザベス朝 public playhouse、つまり Shakespeare に最もつながりの深い劇場を復元しようと云う数多くの試みについて一応の整理をつけることにある。18世紀末 Edmund Malone によって第一歩が記されて以来、立体的なモデルと、平面的なプランとに限っても、今日まで20数種に及ぶ復元プランが発表されており、その個々について総合的な検討、評価が必要とされる時期にきていたことは確かである。

Stinson は先ず劇場復元の基盤となる諸資料の整理からはじめている。当時の劇場の内部構造を具体的に伝える最も有力な資料とされる De Witt の The Swan スケッチでさえ、その解釈や、どの程度信頼できるものであるかと云った点では、学者の間でも意見が分れており、その他の資料も又互いに多くの矛盾を含んでいると云う状態では、立場によってどのようにも資料の取捨選択ができるし、事実自説に有利な資料のみを援用している学者も少くない。Stinson は、しかし、この段階で何ら自己の見解を明らかにしようとしているわけではなく、文字通り資料の整理、リスト作成を目的としているようである。(なお、諸資料の中でも重要なウエイトをもつ、当時のロンドンの地図、鳥瞰図については、この論文の終りに行きとどいた一覧表を附している。)

次に、復元プランの検討に当っては、彼は最初、最も多く復元が試みられた The

Fortune, The Hope, The Globe などの劇場を中心に、その個々について提出されたプランを比較検討している。たとえば The Hope について言えば、1907年の Archer と Godfrey によるもの、1911年の A. Forestier, 1923年の E. K. Chambers, そして最も新しいものとして C. Walter Hodges が1953年に発表したプランをとり上げ、それらを一一つ比較した上で見解を述べてゆくと言うやり方である。しかし結局最大の眼目となるのは、繰り返し強調されていることであるが ‘the Elizabethan theatre’ の復元をめぐる問題である。つまり、どの特定の劇場を復元しようとしても、資料が充分でないため、或る部分については他の劇場に関する資料を参考にしなければならないのが実状であってみれば、結局断片的に残された資料を総合して ‘Synthetic’ なエリザベス朝劇場の概観を作り上げることになるのは当然であろう。それは丁度、何台もの古自動車から、まだ使いものになる部品を寄せ集めて、一台の自動車を組み立てる作業に似ている。できあがった自動車はもはやフォードでもトヨペットでもない、単なる ‘自動車’ である。なお注意しなければならないのは英国最初の public playhouse であったとされる The Theatre が建てられた1576年から、ロンドン市当局の弾圧によって The Second Globe がとりこわされた1644年まで、全ての劇場が画一的なものであったとは到底考えられないことである。とすればこの ‘エリザベス朝劇場’ 復元の試みと云うのは、半世紀以上に及ぶ年月の改革、発達の可能性をも見こしたものでなければならぬわけである。Stinson は、Cecil Brodmeier, V. E. Albright, George R. Kernodle など、十指に余る人々によるこの ‘エリザベス朝劇場’ 復元プランについて、それぞれ、何を根拠としたか、さらにその説から何を排し、何をとりべきかを明らかにしようとしている。米国で特に強い影響力をもっている J. C. Adams の The Globe 復元モデルについては A. M. Nagler, C. W. Hodges 等と同様、多分に批判的であり、特に Adams の内舞台に関する理論には真向から攻撃を加えている。

結局 Stinson が最後に、現在のところ最も有力なものとしてあげているのは1958年に C. W. Hodges が発表した The Globe の復元プランである。これは De Witt のスケッチに見られる The Swan の構造に近いもので、前舞台を重視して、内舞台や二階舞台のあり方に疑問をもち続けてきた彼の態度がここにもあらわれている。Stinson の ‘This reconstruction combines a judicious selection of source materials with a thorough understanding of Elizabethan stage practice and a fine sense of theatricality.’ と云う讃辞はさておき、このプランをもとにして、Hodges と Richard

Southern (彼自身も独自のプランを発表している)の手で *Encyclopaedia Britannica* で作る Shakespeare に関する映画のためのモデルが製作されたことは、注目に値しよう。なおこのモデルは現在、Stratford の Shakespeare Festival Theatre に展示されているとのことである。

Stinson の論文に関してなお重要なことは、先に述べた地図、鳥瞰図一覧表の他、もう一つの附録として収められた復元プランの図版である。ここでは論文の中で言及された殆んどプランが集められており、その豊富さだけでも他に例がない。尤も、彼が最もすぐれたものとしている Hodges の1958年のプランが見られないのは皮肉なことだが、これは New York の Coward-McCann, Inc. 又は London の Ernest Benn, Ltd. を通じて入手することができる。縦横、それぞれ22、30インチもある大きな図版で、教室で資料として用いるのにも適している。

最後にこの書に収められた他の二編についても簡単に述べておく必要がある。先ず、M. Paterson の論文は、題によって知られる通りエリザベス朝時代の宮廷における演劇一般についてその責にあった Revels Office に関する研究である。当時の宮廷劇がどのように洗練され、華美を凝らしたものであったかを知ることは、Mask などの伝統を通じて密接なつながりをもつ Shakespeare 劇の理解を助けることにもなるだろう。

Robert Sarlos がとりあげている The Blackfriars に関する研究は、先の The Theatre, The Globe などの public playhouse 研究に比べると、いささかその影にかくれてしまっている感がある。これは Shakespeare の活躍の場が主として public playhouse であったことを考えれば、当然のことと云えるかも知れないが、この The Blackfriars の場合は private theatre とは云っても、後に、Burbage 兄弟の所有に移り、劇団 King's Men が Shakespeare, Jonson などの作品を上演することになったのであるから、The Globe と並んで重要な存在であると云わなければならない。しかもそのような public playhouse としての性格をもつようになる以前について考えてみても、この The Blackfriars における上演のあり方には、中世の伝統や、ルネッサンスの影響が明らかであり、そのような意味でも興味をもたれるものである。

なお巻末の参考書目録には、エリザベス朝劇場、舞台、上演に関する研究が年代順にあげられており、この種類のものとしてはまず最もととのったものであることを付け加えておこう。

*Studies in the Elizabethan Theatre.*

Ed. Charles T. Prouty (The Shoe String Press, Inc., 1961).

## CONTENTS

## CHARLES T. PROUTY

Introduction vii

## MORTON PATERSON

The Stagecraft of the Revels Office during the

Reign of Elizabeth 1

Introduction—Purpose of the Office—The Production schedule—  
 Costumes—Scenery—Properties—Lighting—The Courtly Audience—  
 Summary

## JAMES STINSON

Reconstructions of Elizabethan Public Playhouses 53

Introduction—Historical Survey—The Theatre and the Curtain—  
 The Swan—The Fortune—The Hope and the Second Globe—  
 The “Typical” Playhouse—The First Globe—Summary—Conclusions  
 Appendix: Commonly Reproduced Maps and Views of London

## ROBERT K. SARLOS

Development and Operation of the First Blackfriars Theatre

137

Introduction—I. Development and Decline: Theatrical Background—  
 Development under Richard Farrant—Decline after Farrant—  
 II. Aspects of Operations: Plant—Audience Accomodation—Music and  
 Acting—Repertoire—Staging